

成功の原点 ～自分のルーツを知って、最初の成功をつかむ法～

成功には2つの段階がある。1つは、0から1を生み出して最初の成功をつかむ段階。もう1つは、一度つかんだ成功を土台に、次々と成功を積み重ねる段階。「一度成功しても、その継続は難しい」とある成功者は言う。事業の継続率やマスコミを賑わす人たちの移り変わりからも、それは間違いないであろう。しかし、広く社会に目を向ければ、最初の壁に阻まれて、自分らしい人生を生きられない人々が大半である。そこで、今回はビル・クリントン元大統領のパートナーとしてアメリカ合衆国のファーストレディの座をつかみ、昔でいうところの人臣位を極めた現国務長官ヒラリー・ロダム・クリントン、彼女の『成功の原点』に迫る。

ヒラリーには、3つの顔がある。

1つは、弁護士としてのヒラリー・ロダム。彼女は、『子どもの権利と法律』を専門とする全米でも有数の弁護士である。2つめは、政治家ビル・クリントンのパートナーであり、ファーストレディとしてのヒラリー・ロダム・クリントン。そして3つめは、ニューヨーク州上院議員、アメリカ合衆国国務長官として手腕を発揮している政治家ヒラリーである。今回は才能心理学の観点から、最初につかんだ弁護士としての成功に焦点を当てよう。

学生時代から優秀だったヒラリーは、ウェルズリー大学で初となる卒業生代表演説を行い、直前に行われた来賓議員の演説に対して、アドリブで真っ向から自らの意見を表明して反論。学生たちが総立ちで称賛する一方で、学生の親や学校関係者からはあまりに失礼だと厳しく非難された。彼女の演説をきっかけに地元テレビ局からインタビューを受けることになり、『ライフ』誌にも取り上げられた。このことが、ヒラリーの運命を大きく開く。

記事を見たピーター・エデルマンから女性有権者同盟が主催する青年指導者会議に招かれ、のちのリーダーたちと出会ったのである。なかでも、エデルマンの妻で黒人女性初の弁護士マリアンが『子どもと法律』分野で活動していることを知り、ヒラリーはマリアンのプロジェクトへの参加を希望。無償でなら受け入れるとの条件に、ヒラリーは自ら助成金を見つけて生活費を確保し、プロジェクトメンバーの一員になった。マリアンは、ヒラリーの情熱と才能を高く評価。ウォルター上院議員の小委員会委員に推薦、抜擢され、移民労働者とその家族の生活実態調査に取り組んだ。さらに、イェール大学院2年生のときには、イェール児童研究センターでボランティアとして、幼児虐待問題の研究チームに参加。ヒラリーの子どもと法律への強い関心が家族法の教授の耳に入り、教授やアンナ・フロイトたちの監修本の調査チームに加わるなど、複数の執筆活動に関与した。

ロースクール卒業後は、ウォーターゲート事件に関する調査に携わる若手弁護士チームの1人として活動。1日20時間も事件に関する録音テープを聞くというハードワークを乗り越え、ニクソン大統領を辞任に追い込んだ。このような根性と経験からワシントンでも有数の弁護士事務所での勤務が期待されたが、地元アンカーソー州で政治家として身を立てる道を選んだビルとの関係を優先した。ちなみに、とてもハードだったウォーターゲート事件の調査チームでの経験が、のちにビルが大統領となって弾劾にかけられた際、大きな助けになったと彼女は述べている。

ここまでのポイントは3つ。リスクを取って自分の意見を表明し同世代の共感を得られたこと、ボランティアで実務に携わって経験を積むことで専門家としてのキャリアを築いたこと、専門分野として自身の関心が強い分野を選んだこと、である。

なかでも、才能心理学の観点から最も大切となるのは、彼女が専門分野として、社会的に弱い立場にあった子どもと女性に関する法律の道を選んだことである。**なぜ、彼女は自らの才能を分かち合う対象として子どもと女性を選んだのか？**彼女のルーツには、彼女を突き動かすだけの明確な理由があった。

ヒラリーは、父親の仕事が順調に推移したことで、「とても」と言わないまでも、「かなり」瀟洒なジョージ王朝様式の2階建ての家に住んでいた。郊外の中流階級が集まる安全なコミュニティで育った彼女は安心して包まれた「村」で遊び、高校を卒業するまで、ただ1つの例外を除いて身近な人で離婚した人すらいなかったという。両親は家族を大切に思い、良い教育を子どもたちに施そうと努力し、日曜は教会へ通う熱心なキリスト教徒であった。恵まれた家庭環境で育ったヒラリーは、自らの子ども時代を幸せに満ちていたと述べており、**だからこそ弱者、特に恵まれない子ども時代を過ごした母の影響を受けて、子どもや女性など社会的な弱者に目が行った。**

母ドロシーは、3、4歳の頃から育児放棄に遭い、当時としては珍しく両親は離婚。父方の祖父母に引き取られている。そこでも祖母から監禁まがいの扱いを受けたり、無視されたりとひどい扱いを受け、14歳で祖父母の家を出て、子どもを持つ母親の手伝いという住み込みの仕事を見つけた。時間もお金もなく毎日同じ服を着ていたが、その家で初めて両親が子どもを愛し、かまって指導する家庭らしい家庭を体験したという。ヒラリーは、母親の話聞いても決して泣くことはなく、激怒したという。「1920年代ですら、子どもたちがそういう扱いを受けていたなんて私は耳を疑い、怒りました。父親のいない子ども、両親が離婚してたまにしか父親に会えない子どもたちは、荒れ狂う海に浮かぶ笹舟のようなものです」と述べている。

母は、ヒラリーを女性だからといって何かを我慢したり、制限されたりすることがないように育てた。そして、テレビを見せっぱなしにすることなくトランプやボードゲームで遊び、毎週図書館に連れて行った。痛ましい子ども時代を過ごした母に、愛情と労力をかけられて育ったヒラリーは、毎日この世で起きている差別や貧困、破壊を、黙って見過ごすことができず、「私も何かしなければ！」といつも義務感を感じていたという。この義務感は、自分が恵まれていたからこそ抱く、社会が不公平で不平等であることへの正義感によるものであろう。キリスト教のメソジスト派では『この世の苦しみを少しでも軽減するように、それぞれが実際に行動を起こすこと』と教えるが、ヒラリーはこの考え方に心地よさを感じるという。それは、自身が娘を持つよりもはるか以前、小学生の頃から行動に現れており、中学生の時には、イリノイ州で農業に携わるメキシコ人労働者のために、ベビーシッター組合を設立した。また、同じ頃、彼女は宇宙飛行士になりたくてNASAに手紙を送っている。しかし、NASAからの返事は「女性は宇宙飛行士にはなれない」というものだった。この時初めて努力しても実現できないことがある現実を知り、挫折を味わった。

なぜ、彼女は子どもや、女性、移民など、社会で差別を受けている人、恵まれない人々に対してそこまで夢中になれたのか？その問いに、ヒラリーは「その方がみんな安心だから」と答えている。母が語った子ども時代の話に怒りを感じ、許せなかったヒラリーは、自身の挫折体験や社会貢献活動を通し、社会的弱者への痛みにますます敏感になっていったのである。

加えて、弁護士という職業が彼女に適していた。それは、裁判には明確な敵がおり、戦って勝つことを求められるからである。ヒラリーは、4歳の頃シカゴの郊外へ引っ越したのだが、当初は周りの子どもたちにうまくなじめず、泣かされて帰ってくることもあった。それを見た母は、「この家には臆病者なんかいる場所はない」「やられたらやり返せ。そこで引っ込んではいけない」と家から追い出した。そして、ヒラリーは自分をいじめた子どもと正面から戦い、自分と友情を手に入れたのである。彼女は、戦い、勝って得るという成功パターンをこのときにつかみ、以後そのパターンが繰り返され強化されていった。

父親ヒューは、大学で体育学を専攻、第二次世界大戦中は新任軍人を心身ともに鍛える教官であった。保守的な共和党员で、白黒つけたがる絶対主義者だったという。子どもたちに対しても厳しく、パーティードレスを一着買ってもらうのも、数週間の交渉が必要だったそうだ。中学校でオールAの成績を取った彼女に対しても、「お前の学校は易しいのだろう」と冷静に言うだけで、決して褒めることがなかったという。このような父親のもとに育ったとしたら、どう思うだろうか？どうにか父親に認めてもらおうとし、また父に代わる誰かに認めてほしいと思うのではないだろうか。ヒラリーも同じであった。父親にどう

にか認めてもらおうと、また父親が認めてくれない分、他の人たちから認めてもらえるように頑張った。優秀な学生足らんと勉学に励み、ガールスカウトにも積極的に参加して、賞賛のバッジを集めることに熱中したのである。他の子どもたちの場合はともかく、ヒラリーの場合は、「世の中は厳しい」という現実の重みを感じられるような父の励まし方にやる気を引き出されていた。“強くなれ”とメッセージを発し続ける父が中心に位置するロダム家において、感情を露わにすることは弱さを意味していた。安心と安全に包まれた子ども時代を過ごしたヒラリーは、父が期待をかけ、安易に褒めることなく叱咤激励を続けた影響により、決して感情に浸ることなく、唯一不足する承認・称賛を得ることへの切望感から、誰よりも努力し、「やりすぎる」くらい集中して頑張ったのである。

こうして、ヒラリーは承認されることへの切望感と、子どもや女性が安心して生きられる社会への切望感をモチベーションの源泉に、子どもや女性など社会的弱者とされる人たちの味方になって敵を討つ弁護士となったのである。

ヒラリーは、主観的にも客観的にも「ある」人であり、母が「ない」人であったがゆえに、彼女の関心は子どもや女性などの社会的弱者に向けられた。そして、その人たちと時間を共にし、そのとき与えられるものを分かち合ったことで、彼女は弱者とされる人たちの声に敏感になり、ますます愛情を注げるようになった。

あなたは、誰に関心があるだろうか？今そこに明確な愛情を感じられなくてもかまわない。関心を持つ人たちのために今できることをする。それがあなたの眠れる愛情と才能を呼び覚まし、人々の心の声を聞く耳を研ぎ澄ますのである。この声に応え続けていると、ふとあるとき、自分が成功の階段を知らず知らず登っていたことに気がつくだろう。

あなたの関心は、どんな人に向いていますか？

その人たちのために、今あなたができること、これからしてあげたいことは何ですか？

この問いへの答えが、あなただけの『成功の原点』である。

<参考文献>

『ヒラリーという生き方』

著：クリスチヌオックラン 訳：鳥取絹子 KK ベストセラーズ

『ヒラリー・クリントン 最強のファーストレディ』

著：ジュディス・ウォーナー 訳：河合伸一 朝日新聞社

『セックスとパンと薔薇 21世紀の女たちへ』

著：エリカ・ジョング 訳：道下匡子 祥伝社

『ヒラリー・クリントン 素顔のファースト・レディ』

著：リチャード・コーザー 訳：鳥居千代香 東洋書林

『大統領の最強のパートナー ヒラリー・R・クリントンの歩み』

著：ノーマン・キング 訳：武者圭子 小学館

『村中みんなで 子どもたちから学ぶ教訓』

著：ヒラリー・ロダム・クリントン 訳：繁多進/向田久美子 あすなろ書房

『リビング・ヒストリー ヒラリー・ロダム・クリントン自伝』

著：ヒラリー・ロダム・クリントン 訳：酒井洋子 早川書房